

「われから」 試論

——谷中から谷中へ——

浅野洋

はじめに

「われから」(「文芸倶楽部」明29・5・10)は、樋口一葉がその短い生涯で最後に完成させた小説である。同作が発表されたのは、前月に一括再掲載された「たけくらべ」が「三人冗語」で絶賛され、一躍文名のあがった翌月に当たる。直前の評判が劇的な高まりを見せていただけに次作「われから」への期待も膨らんだが、実際の出来栄えがさほどでもないと見るや、その反動も大きかった。翌月の「三人冗語」において「小説通」は「われから」を次のように厳しく評した。

たけくらべには似るべくもあらず、啻にたけくらべのみならず、濁り江にも及ばず、わかれ路にも及ばず、十三夜にだにも及ばず。(中略) 一葉としては太く劣りたる作なり。(中略) たけくらべを讀みて、この後の作こそと力入れて待ちしだけに、此感殊に深し。

「われから」を、それ以前の主だった作品のどれよりも劣ると酷評した「小説通」は、その理由として同作の「あかぬ節」すなわち欠点をひとまず次のように指摘した。

お美尾が上とお町が上とを、殆んど等分にかゝれたるより、力負けとも云ふものによ、話の筋は先づ作者の手よりこんがらかりはじめて、何を主とも定かならぬやうになりたり。

「小説通」によれば、美尾の物語とお町の物語が「殆んど等分にかゝれ」たため、その作家的力量の不足もあってか話の筋が混乱し、何が「主」眼なのか曖昧になってしまった、と。加えて、お町の物語に挿入された美尾の物語が「長々しき割には」「勢ひに過ぎて」「悉く逸れ加減」とし、物語全体の出来栄えが損なわれたとも述べた。この批判は、「小説通」の見立てがお町の物語を主軸とし、入れ子型の補完的挿話である美尾の物語が肥大しすぎたため、構成上のバランスが崩れたとの見解に基づく。しかし、

美尾とお町の物語が「等分」に書かれている事実は、逆に当初から両者を同等の重みで描出し、二つの物語の有機的な結びつきによる相乗効果が狙いだったとも考えられる。もしそうなら「小説通」の批判は当たらない。後述するように、私見では美尾とお町の二つの物語を表裏一体のセットとして提示し、そこから「われから」の主題が浮上するように構想されたと思われる。

ところで、この「三人冗語」には、上記の構成上のバランス問題以外にも「われから」の読みに関わる重要な言及が見られる。「小説通」に続く「眞面目」や「潔癖家」は主に用字・用語の難点を指摘したが、「ひいき」は「小説通」の批判に反論し、その「防ぎ矢」（弁護）として「お美尾与四郎が上をもやゝ詳しくものしたるは、第九回のお町神前に我が未来を危ぶむところに呼応せしめんがため」とし、この「祠前の一段」を「我はまことに面白く読みたり」と述べ、「小説通」の批判が「少し酷きやうに覚ゆる」と述べた。また、「頑固」は、お町と書生千葉の關係に注目し、「八丈の羽織を書生に打着するとは、免しがたき淫婦の所行」で、これだけでも「肝癖のある男ならば、不義ものと一喝して責むべき価値あり」とし、「お町の挙動、万端芸妓くさくさく、お町千葉といへる男と私通せる事は疑ひなき事実」と述べた。「頑固」の見解は、その後の「われから」読解にも大きく影響する。お町の所業を「不義（私通）」とする断言は、夫と娘を捨て「軍人様」の〈妾〉となる美尾の所業とも相まって、母と娘二代にわ

たる「淫蕩」な血の物語と読む解釈の呼び水となった。

一、お町の不義は事実か

お町と美尾に「淫蕩」な血が流れているとする論拠は何か。まずはお町の場合から検討してみよう。お町淫蕩説の論拠は、書生千葉との不義を事実とみなすことによる。その先鞭は前掲「頑固」の見解だが、湯地孝は、お町が「性的に放恣な性格が嵩じて遂に身を誤り」「書生との不義」に至った一因を「淫奔な母親の血」だとする。さらに藪植子、高田知波、坂本政親らも作品の解釈こそ違うものの、いずれも不義を事実と見、前田愛も母娘の「二代にわたる因果」による不義説やお町落胤説を唱え、関礼子も「不義」をテーマと読む。しかし、その論拠はつまるところ〈噂〉の内容の追認ではあるまいか。

本文の検討に入る前に次の事実を振り返っておこう。明治二十九年五月二十九日（水の上日記）、斎藤緑雨がこっそり一葉宅を訪れる。先客（横山源之助、後述）との顔合わせを嫌った彼は奥の座敷に身を潜めてその帰りを待った。緑雨の用向きは「めさまし草」の「三人冗語」で「われから」評が大きく分かれたので、自身の見解を評論にする前に一葉の「作意」を聞きたいとのことだった。質問の第一は、稲荷社の前でお町が物思いにふける場面（九）で、お町は母親（美尾）の出来事を常々思っており、自分もいつかは母と同じ運命を辿るのではないかと不安が

以前から念頭にあったとする見解（露伴）と、お町の性分からみてそうした思いを常日頃から抱いていたわけではなく、まさしく偶然の出来事として描かれたに違いないとする見解（緑雨）で、どちらが正しいのかと尋ねた。一葉は「誠にこれは偶然の出来事なり。しかれども常日頃おのれも知らぬ心のそこに怪しうひそむ物ありて心細き感はず有しに相違なかるべくさて此事は偶然におこりたるなるべし」と答えた。つまり、祠前のお町の思いは確かに偶然の出来事だが、常日頃、潜在意識には漠然たる不思議な心細さがあったのも確かで、祠前の思い自体はたぶん偶然に生じたものだろう、と。一葉の回答を「二者の間」とみた緑雨は困惑して苦笑するしかなかった。第二の質問は、「町子と書生との間に実事のありやいなや」というもので、上田敏が「正しく実事ありたる也」と読み、緑雨の読みは「作者がこと更に読者をまよはさん為にたくミの詞をもて遊びしのみ 実事はいまだなかりしもの」であった。一葉は「この処を明らかにかゝざる処作者のずるき手段にて誠は作の巧妙なる処ともいふべく何方より見るもしか見ゆる又よかるべし かゝる事は作者に問ふ事をせずして我れの見をもつて批評を試むるこそ誠の批評とはいふべきものなれ」と述べ、「我れいまだ力足らずして眼識さやかならぬを憂うとはぐらかした。結局、一葉は緑雨の問いに正面から答えず、お町と千葉の私通（不義）が事実か否かを明かさなかった。

この問題について渡辺澄子は、本文を丁寧読みこんで不義説

を一蹴する。氏は、上記ほかの論もふまえつつ、お町が「千葉にした親切」は彼女の「自慢」とする「道楽」の一種で「他意も邪気もない」こと、二人の境遇の「懸隔が大きすぎる」こと、他方、千葉も奥様の親切を「有難いが迷惑に感じ」「恐れ入ってただ頭を下げるばかり」で「嬉しく感じながらひたすら恐縮し」「淫」を感じしていない」ことなどから、お町が「意識的な『しどけな』さで千葉の官能を刺激しようとしたとはどのような読み取れない」と断じた。きわめて真つ当な読みといえよう。

蛇足ながら、語り手は不義の〈噂〉の発信源である「仲働きの福」について、その口舌が浮薄で信用しがたいことを繰り返して述べている。たとえば「渡り者の口車よく廻りて」（八）「饒舌の癖」「悪口の福」「福が能い加減なこしらへ言、似つこらしい嘘を言ふ」「舌を廻して、た、き立る太鼓の音」（十）などと評し、また「珍事今出来の顔つきに、例の口車くる／＼とやれば、此電信の何處までかゝりて、一町毎に風説は太りけん」とそのいかがわしさを述べ、さらに「そんなにお前正直で務るものか。と嘲笑ふやうに言ふ」と福の性根の悪さも明言している。しかもその動機が「奥様お着下しの本結城」が「我が物」にならなかつた「恨み」とされ、噂が悪意のある故意の虚偽情報だったことも明かされる。また、千葉についても、語り手は讒言ゆえに配流の身となつた「汨羅の屈原」の譬えを引き、科無く追われる身の憐れさを述べ、不義が事実でないと示唆している。さらに末尾でもお町

は「我に悪き事あらば何とて小言を言ひ給はぬ」(十三)と迫り、自身に「悪き事」の覚えがないことを表明している。不義を事実と認定するには、これらの言表をすべて覆してみせる必要がある。お町と書生千葉の間に不義の事実など存在せず、お町が淫蕩との論拠はない。

もしお町と千葉の不義が事実ならば、夫・金田の酷薄な仕打ちにも一理あることになり、お町がゆえなく放逐される理不尽さやその哀しみ・無念さも大きく減退し、物語は夫婦が互いの臍の傷をあげつらう痴話喧嘩に墮してしまふ。しかも、物語の重要な構成要素である〈噂〉は、実態に反する信憑性の乏しい情報だからこそ効果的なのであって、それが不義の事実を正しく伝える情報だとしたら、本作における〈噂〉の手法自体が意味をなさない。つまり、お町と千葉の間に不義の事実があったとする解釈は、お町の物語自体を根底から瓦解させる読みといえよう。

なお、念のために付け加えると、お町の物語にはモデルがあると思われる。「につ記」(明25・4・23)に次の記事が見える。

晴天 小石川へ行 日就社員鈴木幸次郎氏師君履歴を探報の爲訪問 二階にて種々談話あり 其間島田政子君と共に下座敷に語る 悲話縷々思はず袖をぬらしぬ

師の中島歌子が「読売新聞」(明25・4・25)掲載の談話筆記の取材を受けている間、弟子たちは二階に上がって四方山話に花を咲かせ、その中で一葉は島田政子の「悲話」を聞いて深く同情

し、涙を流している。政子は、『横浜毎日新聞』の社員総代島田豊寛の養子で第一回総選挙(明23・7)に神奈川第一区から立候補して当選した代議士島田三郎の夫人である。島田は演説ぶりや廃娼運動で名を馳せたが、家付き娘の政子と書生の仲を疑い、一方的に離縁したとされる。これには「一葉が「皮肉」屋の」半面、虐げられた女性の味方で、大隈伯が糟糠の妻を追ひ出し、政磨子夫人を迎へた場合や、島田三郎と政子さんの折などは、虚栄のために没人情を行つたものとして痛撃してをりました」との穴澤清次郎の回想や「『われから』のお町の日常生活が離籍と成りし嶋田三郎夫人に似てゐますから『ひなっちゃん』「我から」のお町は政子さんがお手本ね」と言ひましたら、黙つてニヤ／＼笑つてゐました」という田辺夏子の証言もある。この一件の状況とお町の物語は確かに酷似しており、上記の証言からもモデルだった可能性は高い。一葉は政子に不義の事実がなかったからこそひときわ同情したわけで、お町もモデルと同様、書生千葉との不義の事実などなかったと思われる。

二、美尾外泊の「秘密」

一方、美尾淫蕩説の論拠と目されるのは、語り手が「秘密あり」(三)と述べた与四郎不在中の彼女の外泊に対する推察である。端的にいえばその夜に彼女が「淫蕩」な行動に及んだとの読みによる。さらに美尾のお町妊娠もその夜の結果とみなす見解も

ある。だが、そうした読み（推察）は本当に妥当なのか。

「結婚五年目の春、梅咲く頃」、「如月」の土曜の夜、同僚との梅見を切り上げた与四郎が帰宅すると美尾は不在だった。隣家の主婦によれば、彼女は午後三時過ぎ、実家から迎えにきた「立派な車」で外出し、翌日の四時過ぎに帰宅する。外泊の理由を美尾は実家の母の急病（癩）看護のためと語り、与四郎はその釈明を容認するが、語り手は彼の知らぬ「秘密あり」（三）と述べる。この「秘密」の真相、つまり美尾外泊の理由が実は母が頼りとする「軍人様」と関係を結んだ一夜とみるところに美尾淫蕩説やお町落胤説が生まれる。だが、作中に何の言明もない「秘密」の内実は果たしてどのように読めるのか。

美尾の妊娠と出産は動かせぬ事実なので、「如月」以降の妊娠の経緯を見直してみよう。年代設定が不明なので、とりあえず「われから」執筆時の明治二十九年を例に時間的推移を検討してみる。まずこの年の「如月」旧暦二月は、新暦3月14日〜4月12日に当たる。ただし、美尾の「病氣」が「お目出度」と判明する「三四月の頃」（五）が新暦であるなら、外泊当夜とほぼ同時の妊娠判明となり、これはあり得ない。仮に「三四月の頃」が旧暦であるなら、「三月」は新暦の4月14日〜5月12日で外泊の翌月に当たり、これも妊娠の判明は困難であろう。旧暦「四月」は新暦5月13日〜6月10日であり、判明は辛うじて可能かもしれないが確実ではない。加えて、「三四月の頃」という曖昧な記述も腑に

落ちない。次に、「隣近所の人々」から「おめで度う」と言われる「五月雨の頃」（五）は新暦六月であるが、和装は腹部の膨らみが目立ちにくく、誰の眼にも妊娠と知れるには相当せり出しているはずで、「如月」（新暦3月14日〜4月12日）から起算すると、新暦六月は妊娠三カ月であり、外目にも明らかかな体形になるとは思えない。また「十月」が出産に「当る月」とされ（五）、現に美尾は十月十五日にお町を出産する（六）。この日付（10月15日）が新暦ならば旧暦二月（新暦3月14日〜4月12日）から起算すると、長く見積もっても七カ月の出産であり、いかにも早すぎる。仮に旧暦（新暦11月10日）だとしても八カ月未満であってこれも相当に早い出産といえよう。だが、語り手は美尾の出産について特に言及しておらず、とすればいわゆる「十月十日」の月の満ちた出産だったと考えられる。つまり、「如月」を起点とすれば美尾の妊娠や出産の経緯は時間的に整合せず、逆にその不整合が当夜に美尾と軍人との間にコトがなかったことを意味する。つまり、美尾の妊娠は外泊時（如月）より以前の与四郎との関係によると見るしかない。

では、一葉はなぜ美尾の不審な外泊と妊娠・出産を並記し、いかにも因果関係がありそうに描いたのか。それは一葉がひそかに読者（特に男性読者）に仕掛けたトリックだったと思われる。前述のごとく一葉は町子と書生の間に私通の「実事」があったかという緑雨の問いに対し、「明らかにかゝざる処」が本当は「作の

巧妙なる処」と答え、緑雨から「こと更に読者をまよはさん爲にたくミの詞をもて遊」ぶ作者と評される。つまり、一葉には時にわざと誤読を誘う微妙な描写を用いて読者の「眼識」を試そうとする冷徹さもあつたのである。外泊の夜をあえて旧暦の「如月」としたのは、余情に富む表現で「秘密」に陰影を加えて醜化する〈紗幕〉と思われ、旧暦と新暦を混在させたのも、外泊（如月）と妊娠判明の新暦「三四月の頃」が同時期との事実を紛らわし、実は外泊と妊娠が無関係であることを隠蔽するための〈詐術〉だつたと思われる。一葉はなぜこうした手のこんだトリックを仕掛けたのか。それは自身の胸中深くに渦巻く「女成ける」口惜しさや無念のうちに当時の社会に横行する〈女性に對するまなざし〉への違和感を抱いていたからである。たとえば、美尾の外泊と妊娠・出産が並記されるのを見た途端、両者をすぐに直結させ、当夜にコトがあつたと決めつける錯誤やバイアスに満ちた〈まなざし〉、そして、〈女性の「秘密」の夜〉となると即座にふしだらな文脈で捉える偏見、さらには〈女・夜・性〉を一直線に結びつけて疑わぬ安直な俗情、そうした〈女性へのまなざし〉に對する反発や憤りから生じる皮肉や冷笑を抑えがたかつたのであろう。このトリックの動機を一つに特定するのは困難だが、当時の〈女性へのまなざし〉に浸透する通念や支配的な感性が陥りやすい〈誤読〉を落とし穴として仕掛けたのであろう。お町の妊娠を軍人との関係によるとする誤読はそうした錯誤やバイアスや偏見の産物

といえよう。そして、何よりも前出・渡辺^(註1)氏が述べるように、美尾が狂奔時にお町を残してゆくのは、お町が軍人の子供ではなかつたからである。となれば、外泊当夜、美尾が軍人と結ばれたとの推察は成立せず、美尾淫蕩説の論拠にはならない。

では、語り手が仄めかす「秘密」の実態とはどのようなものであつたのか。美尾を迎えに来た「綺麗な車」(三)は「従三位の軍人様」の差し向けであるから、軍人が母の住む実家に向向していたのは事実だろう。だが、初対面の二人が下町の侘び住まいでいきなり結ばれるとは考えにくく、となれば、待合などに移動して一夜を過ごしたとも考えられるが、それを窺わせる語り手の言及はない。では、その夜、実家では何があつたのか。思うに、実家では軍人に美尾の〈顔見せ〉が行われ、その美貌を確認した軍人が彼女を〈妾〉にすることを許諾し、美尾本人が受諾すればとの言葉を母に与えて退去したのではなからうか。軍人の許諾なしには母も妾話を美尾に持ち出すことはできない。問題の「秘密」とは、この〈妾話の成約〉と〈美尾の受諾〉をさすと思われる。むろん美尾にとって、夫ばかりか娘も捨てて妾になるというのは容易ならぬ決断で、その話を受諾するまでには迷い、悩んだに違いない。しばしあって、美尾が受諾したのち、母は自分の考える今後の計画を打ち明け、それをめぐって二人は密談を重ね、夜を更かしたと考えられる。こうした経緯があつてこそ後日の母と美尾の行動も可能になる。外泊の内実をこのように考えると、当夜

に美尾が初対面の軍人と結ばれ、その結果、お町を妊娠したとの推察はどう見ても強引すぎる。お町はやはり与四郎の娘とみるのが順当で、重ねていえば美尾の淫蕩説に論拠はない。

美尾がお町を出産した翌年の新春、母は躊躇なく京都へ旅立つ(七)。「一卜月」後、「昼前」に出奔した美尾は、鏡台の引き出しに「美尾は死にたる物に御座候、行衛をお求め下さるまじく」の置手紙と二十円の新札を残して姿を消す。これは母の計画どおりの行動で、新札の金は妾契約の手付けの一部であろう。

母が先導した計画とはいえ、軍人の妾話を受諾したのは美尾自身の決断である。とはいえ、ここに至るにはそれなりの曲折や動機もあった。「谷中」生まれの美尾は幼少期から貧しい家庭環境に育ち、「幼馴染」(三)の与四郎も同様の境遇だったろう。それゆえ結婚当初は彼女も彼との生活に何の違和感も不満も感じていない。現に彼女は「誠ある良人の情心なまじこころうれしく、六畳四畳一間の家を、金殿とも玉楼とも心得て」(四)いた。つまり、美尾の視線が内向きである限り、月俸「八圓」の暮らしにも刃辺の幸福を感じ、心は平穩だったのである。しかし、その美貌を振り返った若い男たちから「惜しい女に服粧なまじが悪い」と「笑はれ」て「若き心には情けなく」「不覚に袖をやしぼり」(四)、加えて、結婚四年目の四月十七日、上野界隈に花見に出掛けた折り、たまたま見かけた華族一行の華美な豪奢さに心を乱される(四)。これまでの美尾を取り巻く日常生活とは異質の〈外部〉に眼が開かれた

途端、彼女の価値観は大きく揺さぶられる。自身の美貌に見合う「綺羅」を誇る「服粧」や「濃厚」な「化粧」などを可能にする上等な生活への欲望がにわかに喚起され、うだつのあがらぬ与四郎との生活や行く末の不安に気分はふさぐ。そんな折、自身の老後を案じる母が若夫婦の生活に介入し、展望のない夫との生活に見切りをつけるよう唆し、美尾自身も貧窮からの脱出を願って妾になる道を決断したのである。それは母への孝養の道でもあり、粗末な衣裳を嘲笑される惨めな生活からの脱出を実現する新生活の方策であった。こうした切実な決断をも「淫蕩な血」ゆえとするのはやはり予断に縛られた解釈であろう。もし美尾の妾になる決断を「淫蕩な血」ゆえというなら「わかれ道」(明29・1「国民之友」)のお京の選択もまた淫蕩な血のためとなるが、もちろん一葉の筆致にそうした気配はみじんもない。

三、谷中を往還する物語

「われから」にはお町と美尾の二人の物語を明確に結ぶ重要なキ・ワードがある。それは「谷中」という地名である。美尾の物語では、彼女の母が住む実家、すなわち美尾の「生れた家」(四)が「谷中」(三)とされ、一方、お町の物語では、夫の金田が離婚後のお町に用意したのが知人から買い取った「谷中」の家(十三)であった。もし母と娘の〈因果〉をいうのであれば、それは美尾が妾になるのも厭わず見捨てた生育の地と、お町が妾を

持つ夫に追いやられてゆく地が同じ「谷中」である点で、これはむろん偶然ではない。つまり、美尾が夫と娘を捨ててまで脱出した世界にお町は逆に押し戻されるのだ。すなわち、「われから」は母と娘が「谷中」の地を往還する物語なのである。

「谷中」は、旧下谷区内の地域である。「下谷区」は、その名の通り、総じて上野台地が見下ろす低地で沼や池の多い湿地帯であったが、利根川や荒川が運ぶ土砂の堆積や埋め立てによって陸地化した。江戸時代初期における町開発の土木工事を担当した下級武士の給付地が前身で、その土地柄から明治初期には土地を失った流浪者や低所得者が多く流れこみ、日清戦争期には急増して所々にスラム街を形成した。^(注16) 下谷区は、上野台地の南部にあたる上野、同じく東麓の下谷、北西部の谷中、同じく南麓の不忍池周辺の池の端の四地域からなる。一葉一家は、明治十四年七月から二十一年八月にかけて、下谷区御徒町一丁目、同三丁目、上野西黒門町などに居住し、また明治二十六年から二十七年の龍泉寺町の生活もあって、下谷区内の土地柄に精通していたと思われる。なお、結婚五年目の与四郎と美尾の家は「本郷附木店」(三)とされるが、そこは旧本郷区(現文京区)本郷五、六丁目付近で、現在の本郷通りを挟んで東京大学の南西向かい側の地域だが、明治九年四月、一葉の物心がつく頃から約五年間、一家が比較的平穩に暮らした法真寺隣の屋敷(本郷六丁目五番地)の周辺で、やはり馴染みの地を作中に用いている。与四郎が残した家もこの

かつて暮らした「屋敷」をイメージしたものでだろう。

「明治二十九年二月調査 東京市下谷區全圖」^(注17)の「区内町名一覧表」によれば、下谷区には「上野公園地」と「下谷公園地」を除く全七十三の町があり、下谷龍泉寺町も下谷区の東北隅に位置し、吉原遊郭のある浅草区に隣接している。また、「たけくらべ」(八)に登場する「万年町や山伏町」(正式町名は、「下谷」の冠がつく)は様々な門付け芸人や日雇い人夫などを生業とする貧民たちの「塀」^(注18)で、特に万年町は横山源之助著『日本之下層社会』^(注18)が、四谷鮫河橋・芝新網とともに「三大貧民窟」の一つとしたスラム街であった。同書によれば万年町以外にも「下谷區には南稲荷町・北稲荷町・山伏町・豊住町・車坂町に貧民の住めること甚だ多く、特に南稲荷町・山伏町のごとき、囚人・失踪者を出だすこと万年町の上に出で、貧民窟として共に意を置くの要あり」とし、「路地の醜穢なるは万年町最も甚だし」とされる。

一方、「谷中」一帯は、荒川流域の低地を挟んで上野台地と本郷台地の間の低い台地で、江戸の明暦大火(一六五七)をきっかけに神田などから多くの寺院が移転した寺町であった。その門前町が徐々に町場と化し、庶民の住む街区となる。「谷中」の中心は谷中墓地で、幸田露伴が「五重塔」(『小説尾花集』明25・10、高山堂)に描く「感應寺」の後身「天王寺」(天保14年に改称)の広大な寺域の一部を東京府が接収後、明治七年に公共墓地として開園、現在の谷中霊園の前身にあたる。露伴は谷中天王寺際の

銀杏横町(谷中天王寺町二十一番地)に住み(明24〜26)、「五重塔」は居住地の産物でもあった。

「谷中」にも多くの町々があり、前述の「町名一覧表」によれば「谷中」の冠のつく町名は「谷中町」をはじめ「谷中清水町」「谷中坂町」「谷中眞島町」「谷中三崎町」「谷中三崎南町」「谷中三崎北町」「谷中茶屋町」「谷中天王寺町」のほか、「谷中初音町一丁目」から同「四丁目」を加え、計十三の町で構成されている。「われから」の「谷中」が具体的に上記のどの町を指し、どのようなイメージなのかは定かでないが、「大つごもり(上)」「(明27・12「文学界」)にはお峰の伯父夫婦が八百屋を営む場所が「(谷中)初音町」とされ、文中では「初音町といへば床しかれど、世をう(憂)ぐひすの貧乏町ぞかし」とされる「細民窟」であった。先の『日本之下層社会』では「幾種の貧民を一団の下に集め居る一現象」として「木賃宿」を採り上げ、内務大臣品川弥二郎が市内各所に散在する木賃宿を「場所を限りて木賃宿免許地」に定め、白金猿町(芝区)、浅草町(浅草区)、青山五丁目(赤坂区)、花町・小梅業平町(本所区)、駒込富士前(本郷区)、富川町・西霊岸町(深川区)などとともに初音町(下谷区)も免許地となる。これは定住先のない最下層の人々を囲い込む隔離政策の一種であり、谷中初音町も貧民の多い細民窟であった。ちなみに「十三夜(下)」「(明28・12、「文芸倶楽部」)で車引きに零落した高坂録之助の「寝處」が「浅草町の安宿(村田)」とあるの

もまさしく「木賃宿免許地」の宿であった。

「(谷中)初音町」はおおむね天王寺の旧門前町に属し、同「二丁目」の南は「谷中茶屋町」に隣接する。茶屋町には元禄十六年(一七〇三)頃、参詣客目当てに夕方には片付けられる水茶屋(腰掛茶屋)が約五〇軒ほど並び、「いろは」の暖簾をかけて「いろは茶屋」と称した。享保年間(一七一六〜三三)には「富突」(富籤)を月並興行し、目黒不動や湯島天神と並ぶ江戸の三富として盛況をきわめ、簡便な掛茶屋はやがて居附きとなり、売色の茶屋になった。永井義男によれば、戯作『いろは雛形』(文政三年、一八二〇)には「門前に十余軒の料理茶屋、六十余軒の水茶屋が軒を並べて居た」とある。人が集まる寺社門前にはおのずと岡場所(私娼窟)が出現し、その代表例として根津・音羽・仲町・赤坂氷川・芝神明・赤城・市谷八幡・回向院前などとともに「谷中いろは茶屋」の名も見える(前掲永井書)。茶屋町の岡場所も寛政の改革等で一時は消滅したが、まもなく復活、明治になっても私娼が多く出没する町であった。初音町はその私娼窟に隣接し、それゆえ風紀も芳しからず、また、「木賃宿免許地」とされる細民の多い「貧乏町」で、それが「谷中」の町名から連想される一般的な印象と考えられる。「われから」の「谷中」という地域名も、初音町の実態に近いイメージであったと思われる。したがって、先の言を補えば、「われから」は母と娘が貧民の多く住む「谷中」の(細民窟)を往還する物語なのである。

美尾の母は現在の暮らし向きを「この年をして人様の口入れやら手伝ひやら、老耻ながらも詮の無き世を經まする」(六)と語る。母の生業の一つ「口入れ」は、「大つごもり」でお峰を山村家に紹介した「受宿の老媪さま」と同業で、彼女はお峰に山村家の内情をふきこみ、家族のあしらい方を教え、「厭やになつたら」すぐやめてもよく、「奉公の秘傳は裏表」にあるとうそぶく。「口入れ」で世を渡るこのふてぶてしさや素性の怪しさは、美尾の母にしても同様であつたらう。美尾の生育の地は「谷中」と明記され、母自身の現況も語られるが、それ以外の「谷中」の生活環境は具体的に描かれない。また、その現況に至る過去(前史)も全く語られず、美尾の父に関する言及もない。一方、孫をもうけて間もない美の娘を躊躇なく(妾)に差し出す母の発案は、普通ではあり得ぬやり口で、それは一般の市民生活と異なる「谷中」特有の生活論理だったと考えられる。つまり、母自身も元は(妾)などの日陰者の身だったがゆえにそうした措置に抵抗がなく、美尾も父の名を世にはばかる私生児だった可能性が高い。作者一葉はそうした事情を一々語らないが、当時の読者には「谷中」の名だけでそうした生活環境のイメージが伝わり、父の不在や母の境遇や美尾の出自なども想像できたのではあるまいか。とすれば、「われから」の物語の〈起源〉は、美尾の母の過去も含めた「谷中」という地域の社会性にあり、そこを出自とする女たちの物語だったということになる。美尾の見捨てた地とお町の追いやられ

る地を同じ「谷中」としたのは、その地を往還する母と娘の物語を裏表のセットとして提示し、細民窟を出自とする女たちの因果ないし宿運を描き出すための設定だったと思われる。

四、横山源之助と一葉の交流

自身の生活状況もあってか、「大つごもり」や「にこりえ」など、以前から下層社会に生きる女たちを注視してきた一葉だが、なかでも細民窟「谷中」を出自とする母と娘の物語を描くに際して、何か示唆を得るところはなかったらうか。

たとえば明治二十八年十二月から二十九年一月にかけてとされる一葉日記「水のうへ(一月)」の一節に次の記事が見える。^(注2)

かどを訪ふ者日一日と多し 毎日〔新聞〕の岡野正味(知十)天涯茫茫(横山源之助)など不可思議の人々来る
茫茫生(うき)世に友といふ者なき人世間(目)して人間の外
おけりしとおぼし 此人とひ来て二葉亭四迷に我れを引あ
はさんといふ 半日がほどをかたりき

樋口家には日を追うごとに来客が増え、その一人に前掲『日本之下層社会』の著者横山源之助の来訪もあった。ただし、当該日記には日付がなく、横山の来宅も一月中のはずだが、実際の日付は不明である。上記の横山の来宅からやや間をおいた翌月の日記「みづの上」(明29・2・20)には次のような記事が見える。

しばし文机に頬つえつきておもへば誠にわれは女成けるも

のを、何事のおもひありとてそはなすべき事かは（中略）かかる界（筆者注・毀誉褒貶の囂しい文学世界）に身を置きてあけくれに見る人の一人も友といへるもなく我れをしるもの空しきあやしう一人この世に生れし心地ぞする 我れは女なり いかにおもへることありともそハ世に行ふべき事かあらぬか

この当該日記の後続部分は手紙や『通俗書簡文』や歌稿等の下書きで、「（中略）以後の引用後半がこの日記の末尾である。右の引用では「わ（我）れは女成（なり）」の語が繰り返され、そのあとに「何事のおもひありとてそはなすべき事かは」や「いかにおもへることありともそハ世に行ふべきにあらぬか」という同様の文言が続く。作家一葉の存在を象徴するフレーズとしてしばしば引かれる一節だが、そこには当時の社会的抑圧に抗し難い女性の限界に対する口惜しさと、自身の「おもひ」を「なす（行ふ）べき」方が閉ざされた無念さもうかがえる。これは一葉の深く切実な内なる声であるが、同様の文脈をあえて二度も繰り返す執着ぶりには、無念さをさらに増幅させる別の理由もあったと思われる。それは日々つる身体の衰弱が漠然と死を予感させ、自分にはもはや残された時間が少ないとの焦燥感や、さらには後述の横山との対話によって刺激を得、せつかく昂揚した思いを自ら抑制せざるを得なかった無念さなどではあるまいか。

先の日記引用中で注目すべきもう一点は「あけくれに見る人の

一人も友といへるもなく我れをしるもの空しきあやしう一人この世に生まれし心地ぞする」とある一節である。「たけくらべ」再掲載後、にわかになまなま高まった替辞にも冷淡な皮肉をもらす一葉の心境は、周囲の熱狂とは逆に「一人の友といへるもなく」「一人この世に生れし心地」すなわち深い孤独感であった。この日記の記述からほどなく、同年二月二十九日夜、一葉宛てに発信された横山書簡に次の記事が見える。

本日非常に長座失禮此事に候どうやら貴方の人躰も朦朧の中に相判り候心地被致候同病相憐むせいか本日一日小生の頭腦に貴方を浮はせ候いき（『一葉に與へた手紙』百七十二）

「一月」の来宅記事と二月二十九日付書簡では日時のズレが大きく、「長座」の「失禮」を詫びたこの書簡の来訪は別の機会だろう。後日（『ミつの上日記』明29・5・29）にも「はなす事長し」という横山来訪の記事があり、彼の「一葉宅訪問は複数回に及んでいる。横山は上掲の書簡を次のように続ける。

御婦人の身にして色々御心配きざかして察し上候人生茫々前途は如何被遊候やらむと窃に心配申候唯たわれ等は小さな人間でなく大きな人間に致度ものと存候世間のボンクラ共に奇物とか変物とかいふ愚な形容辞を間々に加へられぬ様に。余りに馴々しく申上候てはと遠慮せられ候へども改めて此事申上候人間の運命と世相の眞實御瞑想余り氣迅なる事御忍耐生活を處せられん事はれ小生の第二に貴方の望む

ものに御座候当分確實なる見込つき候まで文學者生活御忍耐如何に候や(以下略)

先の一葉日記(明29・1)で「不可思議の人」とされた横山と一葉との出会いはきわめて興味深い。一葉は面談の内容を何も記していないが、初対面でききなり「半日」も居座った人物を迷惑がっておらず、皮肉屋の一葉にしては悪口も嫌悪感ももらさぬところをみると、面談の内容はむしろ彼女の関心や共感をよぶものだったと考えられる。たとえば、「一月」の一葉日記に「茫茫生(横山)ハうき世に友といふ者なき人」とあるのは、先の日記(明29・2・20)の末尾で自身を「一人も友といへるもなく」云々と孤独感をかこつ述懐に通じる。また、横山が「貴方の人躰も朦朧の中に相判り候」と述べたのは一葉の人間性をぼんやりながら把握できたとの意味と思われ、その上で「同病相憐む」と述べたのは「世間のボンクラ共」に同調せず、「友」など持たぬ孤高の境地を共有する仲間を意味するのではあるまいか。だとしたら、二人はすでに浅からぬ同類意識を感じていたことになる。そして、横山が「御婦人の身にして色々御心配無かし」と述べたのは、その同類意識に心を開いた一葉が珍しく自身の「心配」事を彼に語り、自身や一家の「前途は如何」の「不安」を吐露したことをうかがわせる。横山はさらに「人間の運命と世相の眞實」といった問題をあまり性急かつ深刻に捉えず、「忍耐」をもって一定の「見込み」が立つまでは「文学生活」を守るべきだと忠告す

る。この点について野口碩^(註27)は「一葉がほのめかした意思の輪郭を鮮明にとらえることは難しい」としつつも、次のように推測する。

人間の運命と軽薄な賛辞を自分の作品に寄せる世相の眞實に抗して、文學者生活を離れ新しい生き方で社會との獻身的なかかわりを意圖した棄て身な考えを、それとなく述べたようである。

「軽薄な賛辞」を「世相の眞實」とみる点は同意できないが、後半部の方向性はほぼ同感である。より具体的にいえば、一葉は眼前の横山が日本の下層社會に迫ったルポ(の話題)やその姿勢に刺激され、自身の生活状況もあって「人間の運命と世相の眞實」の問題に直接コミットする「文學」以外の性急な方策(道)、たとえば社會の改良運動などに身を投じることを訴えたのではあるまいか。しかし、横山は彼女の性急な熱意を押しとどめ、当面は作家活動を継続すべきと冷静に説いた。先の「わ(我)れは女成ける(なり)」云々の文脈の繰り返しは、横山の説得に鉾を納めたものの、それだけに返って「女なりける」我が身が恨めしく、歯^{はか}齧^みする思いから生じた筆の走りではなかつたらうか。

五、「われから」と「人間の運命と世相の眞實」

ところで、「われから」の本格的な執筆と成稿は明治二十九年四月とされるが、二十九年初頭の断片「無題I」をはじめ多くの

草稿類が「われから」の断片と考えられている。^(注28)つまり、上述の明治二十九年一月から五月に至る一葉と横山の交流はまさしく「われから」の構想・執筆時期に重なる。単行本『日本之下層社会』は三年後の刊行で、この年十一月に没した一葉はもちろん読んでいない。

明治二十七年後半に「毎日新聞」の記者となった横山は、一葉との面談以前に同紙上に「社會の觀察(其二)」(明28・5・10、署名「天涯茫茫生」以下同じ)を始めとし、管見の及ぶところ、「最近の木賃宿見聞記」「都会の半面/光明の方面暗黒の方面」「同/東京貧窟一斑」など計20回、また、面談時前後より同年四月までに「貧民の正月(其一)」(明29・1・9)を始め「地方の木賃宿(明29・4・30)など計22回、『日本之下層社会』と同様の視点に立つ下層社会の探訪記を次々と発表している。^(注31)上野図書館に通って多くの新聞に眼を通して一葉がこれらのルポに触れていた可能性もあるが、推測の域を出ない。ただし、対面後の二十九年の記事は眼にしていた可能性は高い。ともあれ、一葉が熱くなった「人間の運命と世相の眞實」をめぐる二人の話題が、下層社会(細民窟)に「世相の眞實」を探る横山のルポや活動に関わるものであったことは確実だろう。日々の暮らしを借金でやりくりし、借家暮らしの一葉一家にとって〈細民〉は決して他人事でなく、その一歩手前の状況だった。また、一葉自身、衰弱してゆく体調から、唯一の稼ぎ手である自分の身に万一の事があれ

ばと、母や妹の「前途」をひそかに危惧する時もあったろう。いづれにせよ、横山との対話に出た「人間の運命と世相の眞實」という問題に一葉が深く共感し、身を乗り出したことは疑えない。そうしてみると、美尾が夫と娘を捨てて京都に出奔し、お町が代議士の「奥様」の座を突然追われる事態は、まさに「人間の運命」ともいえるべき有為転変に該当し、美尾の生育の地とお町の追放先の「谷中」は、「世相の眞實」すなわち社会の裏面である細民窟(下層社会)の典型にはかならない。つまり、「われから」は、横山との対話で熱を帯びた「人間の運命と世相の眞實」という問題をフレームとし、母と娘の「運命」を縦糸に、「世相の眞實」である細民窟(谷中)を横糸に、「浮世の捨て物」(十三)とされるお町の姿や〈妾〉の道しかなかった美尾の姿に「女成ける」口惜しさを投影させた物語と見ることができよう。

ところで、この物語にはさらに別の問題も透けて見える。美尾のドラマは〈妻が夫を捨てる〉物語であり、一方、お町のそれは〈夫が妻を捨てる〉物語である。つまり、母と娘は「捨てる女」と「捨てられる女」としてあたかも〈裏表〉の対の関係にある。問題は、双方がともに正式な夫婦関係すなわち結婚という制度が保証する男女の関係でありながら、脆くも破綻した点にある。美尾や金村のように〈われ〉を優先すれば、結婚がきわめて脆いモノであり、信が措けるものでも幸福をもたらすものでもないことを「われから」は二重に物語る。そこには未婚の独身で一生を過

ごした一葉自身の結婚に対する複雑な思いが投影されているように思われる。一葉が結婚しなかった理由はさまざまに考えられるが、たとえば、渋谷三郎との婚約や一方的な破棄、そして名の知れた後年の接近に対する意地、また、半井桃水との実らぬ恋と周囲の無理解やのちの幻滅、さらには川上眉山の一人合点の言動や無責任な浮名など、それら身近な体験が一葉に結婚への疑念を抱かせた可能性もある。しかし、何よりも重要な樋口家存続からすると戸主の一葉が他家に嫁ぐことは困難という事情が大きく、加えて、士族出身を誇る彼女の気位の高さや女性への抑圧的なまなざしに対する反発なども影響したかもしれない。だが、渋谷の例もあるように現実的な問題としては一家の〈貧〉(借金)も大きな足枷だったと考えられる。美尾とお町の〈裏表〉の「運命」は、結婚生活における「女なる」がゆえの困難や脆弱さに対する一葉の苦い認識の反映でもあるが、切実な一家の〈貧〉がさらに進めば〈細民窟〉に転落するというリアルな危機感が「谷中」を出自とする母と娘の宿運として結婚は破綻するという物語へ導いたのではあるまいか。そうした母と娘の出自や宿運を注視し、予断を排して「外泊」の内実や妊娠の経緯を冷静に読み取るならば、「われから」に対する「小説通」の酷評も大きく変わったに違いない。苦しい病をおして「奇蹟の十四カ月」の最後に完成させた小説においても、下層社会を出自とする〈女〉の苦衷や口惜しさと結婚への苦い認識を冷徹に直視した一葉は、まぎれもなく

己れを貫いた作家だったといえる。

【注】

- (注1) 「文芸倶楽部」(明29・4・10)
- (注2) 「めさまし草」(巻之四、明29・4・25)
- (注3) 「めさまし草」(巻之五、明29・5・25)
- (注4) 「樋口一葉論」(全文堂、昭元・10)
- (注5) 「われから」論(透谷・藤村・一葉)明治書院、平3・7)
- (注6) 「女戸主」と「われから」(駒沢国文)平5・3)
- (注7) 「われから」(國文學)學燈社、昭34・11)
- (注8) 『大つこもり 十三夜 他五編』「解説」(岩波文庫、昭54・2)
- (注9) 「物語としての『われ』」(立教大学日本文学)昭61・7)
- (注10) 「一葉文学における新たな飛躍——『われから』論」(樋口一葉を読みなおす)學藝書林、平6・6) 参照。渡辺氏は、「もし、町が外泊の相手の子であったならば町を連れて出てよかったはず」とし「与四郎の子であればどれほど離れがたく可愛くても、相手の男に対して連れていくことは叶わぬだろう」と指摘する。
- (注11) 渡辺氏(注10)も「町に姦通の事実があったなら」夫の「出しぬけの仰せ」に「泣きながら抗弁する町の悲痛さは消え」て「つまらぬ小説になってしまふ」と述べ、さらに「私を浮世の捨て物になさりますお気か」云々と「夫に激しく詰めよる」「叫びの衝撃力は失われる」と見ており、同感である。
- (注12) 「二葉さん」(「一葉全集」月報第二号、筑摩書房、昭28・5)。但し、『樋口一葉研究(作家研究叢書、吉田精一編)』(新潮社、昭21・10)による。

(注13) 『二葉の憶ひ出』(潮鳴社、昭25・1)。但し、『二葉の憶ひ出(新修版)』(日本図書センター、昭59・9)による。

(注14) 以下の暦は『20世紀暦——曜日・干支・九星・旧暦・六曜』(日外アソシエーツ、平10・11)参照。本文では執筆年(明29)を例としたが、明治21年から29年の9年間で「如月」の新暦が3月～4月間でないのは、明治25年(2・28)と明治28年(2・25)のみである。

(注15) (注10)に同じ。

(注16) 『日本歴史地名大系第一三巻 東京の地名』(平凡社、平14・7)ほか参照。

(注17) 東京郵便電信局(明29・6)発行。但し、『東京市十五区々分図(三)』(東京都、昭47・11)の復刻による。

(注18) 教文館(明32・4)。但し『日本の下層社会』(岩波文庫、昭60・4)による。『樋口一葉全集 第三巻(上)』(筑摩書房、昭62・2)野口碩「補注」は刊行年を「三十一年」とする。

(注19) 和田芳恵「注」『日本近代文学大系 樋口一葉集』(角川書店、昭45・9)。

(注20) 明治二十年(一八八七)の「宿屋営業取締規則」による。

(注21) (注16)および次の(注22)ほか参照。

(注22) 『江戸の売春』(河出書房新社、平26・6)

(注23) (注10)に同じ。渡辺氏は「作者は美尾の母親については説明していながら、父親の形象は排除している」と指摘するが、排除した理由についての言及はない。

(注24) この「水のうへ」を一葉全集(注18)は「明28・12・30―29・1・7」とするが、日記冒頭の12月末から1月7日までの馬場狐

蝶関連の記事のあとに斎藤緑雨から「はじめて文の來たりしは一月の八日成し」と過去形で記し、その「返しをやる」ともある。また、川上眉山が「九日書たる文十日にとどきぬ」の記事や「一月の末二十金もらひぬ」の記事等からすると、一月末頃までの事象を記した日記と思われる。

(注25) 傍線部は原文が旧体難読漢字なので平仮名に改めた。

(注26) 一葉全集(注18)「補注」参照。

(注27) 関良一「一葉小説制作考」(『樋口一葉 考証と試論』有精堂出版、昭45・10)

(注28) 関良一「一葉小説断片考」(注27)に同じ。

(注29) (注18)参照。

(注30) この「毎日新聞」は、現「毎日新聞」の前身である「東京日日新聞」や「大阪毎日新聞」ではなく、発行人・発行所長谷川貞東京市京橋区尾張町新地十番地所在毎日新聞社発行のもの。

(注31) 西田長寿「横山源之助著『日本之下層社会』の成立」(『歴史学研究』昭28・1、第161号)や一葉全集(注18)「補注」を参照。但し、「毎日新聞」(不二出版復刻版)で照合すると異同や遺漏も見受けられた。

浅野 洋(あさのよう)